

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紈」詩軸について：「舟游陽朔二首」其二の解釈と関連させて

岸田，憲也
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/16518>

出版情報：中国文学論集. 38, pp.122-136, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紈」詩軸について ——「舟游陽朔二首」其二の解釈と関連させて——

岸 田 憲 也

はじめに

九州大学には、次のような郭沫若と所縁ある文物が所蔵されている^①。

墨跡・扁額「実事求是」（九州大学総長室蔵）^②

墨跡・扁額「図書館」（九州大学附属図書館医学分館蔵）

墨跡・扁額「福地万間広（五言絶句）」（九州大学附属図書館医学分館蔵）

墨跡・色紙「雖不見青松 白砂心未改」（九州大学文学部考古学研究室蔵）^③

図書（十冊、九州大学附属図書館中央図書館蔵）^④

一九五五年訪日のビデオ「開けゆく道——中国科学代表团訪日記録」^⑤

墨跡・詩軸「盈盈灘水碧羅紈（七言律詩）」（九州大学附属図書館医学分館蔵）^⑥

郭沫若先生顕彰碑（九州大学附属図書館医学分館前）^⑦

以上のうち、詩軸「盈盈灘水碧羅紈」（以下、「詩軸」と略称）は、森本憲治のエッセーによってその存在が知られるものの、最近まで九州大学の関係者のみならず、郭沫若研究者にもほぼ忘れ去られていた。本稿は、九州大学所蔵の郭沫若関連文物のうち、この詩軸に焦点を当て、関連する人物、描かれた情景の分析及び解釈を試みようとするものである。また、郭沫若研究における当該詩軸の価値に関しても言及しようとするものである。

一 詩軸の概要

詩軸の全文は次の通りである（本稿末尾の「図版」を参照）。

盈々灘水碧羅紉萬轉千迴盡異觀岸上青螺

雕不就崖頭白馬畫應難停舟飽食江魚美試彈

驚飛澤鳥寒對酒當歌慷以慨一簣漁火夜方闌

古川直學兄 囑書 戊子初夏 郭沫若（落款・郭／沫若）

末尾の為書から、郭沫若が古川直に依頼されて揮毫したこと、揮毫したのが一九四八年初夏であることがわかる。

では、この七言律詩は郭沫若のオリジナルの作品か、またこの詩軸が初出の作品なのか（古川直のために作った詩なのか）。結論から述べれば、詩軸に書かれたこの七言律詩は郭沫若の作品ではあるが、初出ではない。『郭沫若著訳及研究資料』第一冊には、もとは「舟游陽朔二首」其二という詩題であり、「一九三八年十二月作於桂林。載（光明日報）一九六三年十二月二十四日。見…《潮汐集》五九年作家（作家出版社 筆者注）版四五頁。《崑瀛行》六五年広西（広西僑族自治区人民出版社 筆者注）版九頁。」とある。なお、『郭沫若全集』文学編第二巻にも収録されている。つまり、郭沫若はかつて作った詩に若干の手を加えて古川直に贈ったということになる。

二 詩軸をめぐる三人の人物——郭沫若・古川直・森本憲治——

前述のように、詩軸は郭沫若が古川直という一個人に贈ったものであるが、現在は九州大学附属図書館医学分館に所蔵されている。個人に贈った詩軸が如何して九州大学の貴重文物となったのか。その経緯を知るために、詩軸をめぐる人物関係（郭沫若・古川直・森本憲治）を整理しておく必要がある。

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紉」詩軸について

(一) 郭沫若と古川直

古川直に関して詳細は明らかではないが、前述の森本憲治のエッセーに次のようにある。

級友古川直君は、原籍熊本・生国姫路の神戸育ち。昭和一〇年九州帝国大学医学部卒業、産婦人科教室に入局。昭和一四年上海篠崎医院に赴任、次いで福民医院・上海で開業・応召・終戦・現地残留・知り合いの中国人医師の病院に「留用」。昭和二十七年東京に引き揚げて来たが、戦後の日本の風潮を嘆じて「これはわが住むべき地にあらず」と、昭和二十八年単身貨物船に投じて、希望峰を廻ってブラジルに渡航、後家族を呼び寄せ、現在の首都ブラジリヤから三〇〇キロ位の奥地ゴヤス州で、衛生局長の特別許可を得て無医村（ではなく一応は町）に開業満二〇年、その後サンパウロに移ってブラジル人の私立病院に勤務、一九八三年退職、ブラジリヤに隠退、現在に至るといふ波乱万丈、数奇な運命の持主である。

また、古川直と森本憲治の間で遣り取りされた書簡には、

某日、内山氏「内山完造 筆者注」から郭さんを紹介され六高（大正七年卒）・九大（大正十二年卒）の先輩であることを知り、それから交際が始まりいろいろ御厄介になりました。……終戦の翌年頃（？）、奥さんの事で少々お世話をしたことがあります。

とある。更に別の書簡には、次のようにある。

それから約三年位たってから「一九五二年のこと 筆者注」、小生「古川直 筆者注」は共産党がつくづくいやになり帰国すべく、その筋に出国ヴィザを申請しましたが、仲々ラチがあかないので、「偉い」郭さんに「よろしく頼みます」と手紙を出しましたら、旬日を経ず北京から変な印刷物（帯封つき）が来ました。よく見ると裏には差出人の名前はなく、表の宛名は古川直先生となっており、明らかに郭さんの自筆です。ハハーンと思いましたね。O・Kの無言の御通知でした。果して数日後、上海市政府外僑連絡事務局から出頭令書が来ました。そして出国査証をくれました。郭さんには下手な礼状を出すす御迷惑だろうと思ったので、礼状は出しませんでした。又、あの世界では偉くなるほど、いろいろと気を使う事があるらしいですね。

一連の記述から、当時上海（具体的には日本租界）で郭沫若と古川直の間に一定の交流があったことが読み取れる。

郭沫若は留学（一九一四〜一九二三）や亡命（一九二八〜一九三七）により、通算二十年あまりの日本滞在経験を有している。故に、日本人との交友も広いことは知られているが、彼と日本人との交友に関して、これまで研究がそれほどまでに進展していないのが現状である。¹⁴

（二）古川直と森本憲治

古川直と森本憲治¹⁵の二人は、九州帝国大学医学部の同級生で、ブラジルに居住していた古川直が森本憲治を通じて詩軸を九州大学附属図書館医学分館に寄贈した（一九九二年十月九日）。寄贈の理由として、森本憲治宛の書簡に次のようにある。

別に家宝というほどではありませんが、何れ小生亡きあととは、家族の者共はその取り扱いに困るでしょう。孫は混血ですしね。それでいいチャンスでもあれば日本に送って、どこかの適当な資料館へでも寄附して、保管と展示でもして頂けたらと、かねがね考えておりました。¹⁶

しかし、地球の裏側のブラジルから郭沫若の詩軸を運んで来ることは容易なことではなく、その仲介役を託されたのは当時、在ブラジル日本国大使館の医務官の職にあつた宮本昭であつた。

三 詩軸に描かれた情景——「舟游陽朔二首」其二試釈——

そもそも詩軸のもとになった「舟游陽朔二首」其二は、一九三八年十二月十七日に作られたものである。当時、国民党軍事委員会政治部第三厅庁長の職にあり、抗日宣伝活動の責任を担っていた郭沫若は、戦禍を逃れて桂林の地に身を寄せていた。同年十二月十七日は広西大学（白鵬飛校長）で「戦時教育」というテーマの講演を行っている。講演後、于立群、杜国庠（守素）、何公敢、白鵬飛、沈蘭冰とともに陽朔に向かった。¹⁷ 今日でも「桂林山水甲天下、陽朔山水甲桂林」と称され、多くの観光客が訪れるように、桂林から陽朔に向かう途中には中国国内有数の秀麗な景観が広がっている。一行の移動手段は舟であり、彼らは舟中で夜を明かし、この絶景を満喫した。一連の

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅袂」詩軸について

行程は郭沫若の自伝「洪波曲」⁽¹⁵⁾に詳細な記述が見られる。以下、「舟游陽朔二首」其二の各句と「洪波曲」の該当箇所を対比させる。

<p>「舟游陽朔二首」其一</p>	<p>「洪波曲」</p>
<p>盈盈灘水碧羅紗 万転千廻尽異觀 （漓江及びそこに広がる風景の描写）</p>	<p>・在那奇山異水之中，飄泊了一天一夜，即使不是蘇東坡，也尽可以写出一篇（陽朔賦）了。（あの山水の素晴らしい風景の中を一昼夜さまよえば、かの名作「赤壁賦」を作り上げた蘇東坡ならずとも「陽朔賦」が書けるであろう。） ・滴水很清潔，水流很緩，平穩地在兩岸的山峰中迂迴。（漓江の水は清らかで、流れも緩やかである。穏やかに兩岸の峰の間を迂回してゆく。）</p>
<p>岸上青螺雕不就 崖頭白馬画心難⁽¹⁶⁾ （漓江の断崖と岩石に当たって起る水飛沫の描写）</p>	<p>・有点微雨，更增加了情調。空气是凄冷冷的，遠峰每半藏在煙靄之中。（小雨が情緒を引き立てる。空气は冴えきっていて、遠くに見える峰はどれも霧や靄の中に半ば身を隠している。）</p>
<p>停舟飽食江魚美 試彈驚飛澤鳥寒 （魚釣りや戯れによる狩猟の描写）</p>	<p>・時有水鳥成群而游。（時折、水鳥が群れをなして泳ぎ回っている。） ・我在武漢時曾經買過一只手槍，備而未用，這次是隨身帶着的。中午時分，經天夫人在烹調的時候，我開玩笑地說，打一只水鳥来做菜吧。拔出槍來，砰的一聲——水鳥驚跑了。兩岸突兀在幻境中的寒山也幾乎驚破了。（私がかつて武漢にいた頃を買ったピストルは、所持するだけで使用したことがなかった。今回、それを携えて来た。昼頃、經天夫人「沈蘭冰」が食事の準備をしている時、私は戯れ言に水鳥を一羽射止めて料理しようとして提案した。ピストルを取り出して、バンと撃った——水鳥は驚いて逃げてしまった。銃声は兩岸に聳え立つ幻想世界の寒山の静寂に響きわたった。）</p>

对酒当歌慷慨① 一篝漁火夜方闌
(酌②となつた宴会の描写)

・殷勤的経天夫人沈蘭冰女士更採辦好了一天的糧食，好幾瓶茅台。她決心在船上親手烹調來款待我們。(手厚いもてなしの経天夫人・沈蘭冰女士は、更に一日の食糧と何本かの茅台酒をも用意してくれていた。夫人は舟で自ら腕を振るい、我々をもてなしてくれるというのである。)

・白経天愛唱黑頭、時不時要突然來幾聲(黑風怕)，於是便使得群山震恐，兩岸都發出回響。(白経天「白鵬飛」は黑頭を歌うのが好きで、時々急に「黑風怕」を歌う。すると、山々に響きわたり、兩岸からこだまが返ってくるのであった。)

・経天夫人の烹調很拿手，碰着我們這四大家族，都是饕餮大家而兼高陽酒徒，那就相得益彰了。盤盤必須掃地，缶缶必須嗑乾，有酒便醉，無話不談，真是放縱地過了那麼一天多並不雅的粗人豪致。(経天夫人「沈蘭冰」の料理の腕前はなかなかのものだったが、我々四家族は大食いで大酒飲みなので、ますます腕によりをかけた。皿という皿、缶という缶はすべて空にしてしまい、酒に酔いしれ、ありとあらゆることを語り合い、実に勝手気ままに一日あまりを過ごした。それは上品さに欠けるが、粗野で豪快なものであった。)

つまるところ、「舟游陽朔」一首、其二は郭沫若が于立群、杜国庠、何公敢、白鵬飛、沈蘭冰とともに、漓江下りをした際の舟中での思い出を述べたいわば回想録である。日中戦争勃発後、上海陥落(一九三七年十一月)、首都・南京陥落(同年十二月)、武漢作戦(一九三八年六月十月)等、前線は戦火の絶えない中、一行は実に平和で和やかなひとときを過ごしていたようである。また、「洪波曲」は当初、一九四八年七月から同年十一月にかけて香港『華商報』副刊「茶亭」に発表されたものであり、郭沫若はその後記で「資料很缺乏、当年的日報和雜誌一份也没有在身边。従前偶爾記過的一些日記，但都散佚了，有的也不在身边。因此，唯一的資料差不多是全憑自己的腦子中所殘留的記憶。就象挖煤的一樣，每天從自己的腦子里盡量地挖。然而存煤實在有限，挖出來的又多只是些碎屑，没有斤兩。」(資料が不足して、當時の新聞や雜誌も全く手元にはない。つれづれに付けていた日記も散逸してし

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紗」詩軸について

まい、手元には何も残っていない。故に、唯一の資料が頭の中に残る記憶であり、それを頼りにした。それはまるで石炭の採掘のようで、何日もかかって可能な限り頭の中から絞り出した。しかし、石炭にも限りがあり、その掘り出したものも多々がただの石ころであるように、十分ではない。」と自身の執筆について振り返っている。以上のことから、『洪波曲』の当該部分を書き上げるに当たって、かつての連作『舟游陽朔二首』も重要な資料のひとつであったと考えられる。それは本章の前半で比較したように、実際に行った漓江下りの回想とはいえ、両者の描写が相似していることから言えるだろう。更に、『洪波曲』を香港『華商報』副刊「茶亭」に発表した一九四八年は、彼が詩軸を古川直に贈った年でもある。これは単なる偶然かもしれないが、注意すべき事象である。では、なぜ郭沫若は漓江下りを詠じた詩軸を古川直に贈ったのだろうか。郭沫若と古川直の交友を知る資料として、前述の森本憲治のエッセー²⁷しかない状況下で、冒險的なことは避けなければならないが、筆者は敢えてここにいくつかの可能性を提示してみたい。

中国の名勝として、桂林・陽朔の絶景（漓江下り）は日本でもよく知られていたことから、詩軸の贈り手である古川直を意識して「舟游陽朔二首」其二を贈った。

「洪波曲」と詩軸はともに一九四八年の作であるが、当時「洪波曲」執筆中の郭沫若の脳裏に「舟游陽朔二首」其二が深く焼き付いていた。

「舟游陽朔二首」其二が郭沫若にとつて、「この上ない会心の作もしくは思い出深い作品であった」²⁸。

詩軸を贈った頃、郭沫若一家と古川直一家も同様の川下り旅行（小旅行）を経験した。つまり、場面情況が類似した経験をしたことから、双方が共有して理解できる「舟游陽朔二首」其二を贈った。

以上は依然として想像の域を出るものではないが、の会心の作もしくは思い出の作であったという可能性に関しては、当該の詩が前述のように『郭沫若全集』文学編第一巻、『潮汐集』、『邕漓行』の他に、『光明日報』（一九六三年十二月二十四日）にも発表されていることから、ある程度想像に難くないだろう。また、漓江は于立群の生まれ故郷（広西チワン族自治区賀県桂嶺、現在の同自治区賀州市）からも近いところに位置していて、桂林滞在中彼らは岑蘊文（于立群の母親）や于立修（于立群の妹）とも面会している。²⁹つまり、一九三八年の桂林でのひととき

は同居生活を始めたばかりの郭沫若と于立群⁽²⁸⁾にとつて格別な思いがあつたはずであり、そのような状況で作られた詩も生涯忘れることのできない作品であつたと想像できる。更に、の古川直一家との小旅行の可能性に関して、挙行されたとすればそれは一九四六年夏から一九四八年初夏までの間で、その場所は上海周辺である。そもそも両者が初めて出会つたのは一九四六年五月の上海である。しかし当時、于立群は郭平英を身籠つていた。したがつて、小旅行に行けるとすれば、出産後のことである。また、行き先を上海としたのは、一九四〇年代の中国国内の交通事情を考慮してのことである。

四 おわりに——人々を結ぶ詩軸——

ここで筆者の解釈(含訓読)を提示しておきたい。

盈盈灘水碧羅紈 盈盈たる灘水は 碧にして羅紈のごとく、

萬轉千迴盡異觀 万転千廻して異観を尽くせり。

岸上青螺雕不就 岸上の青螺は 雕もて就らず、

崖頭白馬畫應難 崖頭の白馬は 画くに応に難かるべし。

停舟飽食江魚美 舟を停めて飽食すれば 江魚美し、

試彈驚飛澤鳥寒 試弾すれば驚き飛び 沢鳥寒し。

對酒當歌憶以慨 酒に對ひて當に歌ふべし 憶んで以て慨かん、

一簫漁火夜方闌 一簫の漁火 夜方に闌なり。

——どこまでも限りなく流れる漓江の水は、青々としていて、まるで絹織物を広げたかのようである。そして、あの曲がりくねつた形状こそが、この上ない美しさを醸し出している。川岸の岩石は自然の奇形を作り出し、それはどんな名工が彫つてみよつとも真似ることができないものである。岩石にぶち当たつて生まれる白馬のような水飛沫も描きよつのないほどである。ああ、何と美しいことか。川下りをしながら

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紈」詩軸について

美味おいしいご馳走を堪能した。とりわけ川魚は美味だった。また、かつて武漢で購入したピストルを発砲すると、水鳥たちは一目散に飛び立ち、岸边には一羽も見えなくなった。更に、漁火の明かりを頼りに、茅台酒を酌み交わし、歌を楽しんだり、胸のうちを語り合ったりもした。漁火の下で一夜を過ごした漓江の絶景や楽しかったあのひとときはいつまでも忘れることができないことよ。

以上、九州大学所蔵の郭沫若関連の文物のうち、詩軸に焦点を当て、関連する人物関係、描き出された情景の分析及び解釈を可能な限り試みた。その過程で、詩軸が初出作品ではなく（『沫若文集』や『郭沫若全集』に収録されていない、いわゆる佚作²⁹ではなく）、『舟游陽朔二首』²⁹其二に手を加えたものであることが明らかになった。『舟游陽朔二首』其二に描かれた情景を整理しておく次のようになる。

・ 日 時：一九三八年十二月十七日、十八日午前中（舟中で夜を明かす）

・ 場 所：漓江（桂林）陽朔）

・ 参加者：郭沫若、于立群、杜守素、何公敢、白鵬飛、沈蘭冰＋各家族（？）

・ 天 気：小雨、冷えた空気

・ 舟内での様子：漓江の風景見物、魚釣り、戯れによる発砲、宴会（茅台酒、沈蘭冰の手料理、白鵬飛の歌、

夜通し続いた語り）

ただ、郭沫若が古川直に詩軸を贈った際に、数ある詩の中で「舟游陽朔二首」其二を選択した理由は、現時点では依然として不明である。本稿においても筆者は明言を避け、いくつかの可能性を提示するに留めたが、とまれこの詩軸から郭沫若と古川直、もしくは両家族の交友の一端が明らかになった。この点は従来、『郭沫若年譜 一八九二—一九七八』³¹全三冊にも記載がなく、郭沫若研究者にも知られていなかった新事実である。これは年譜の「記載漏れ」というよりも、むしろ今後の研究によって克服されるべき新たな課題であり、日本人との交友から郭沫若の文学活動及び行動を考察することもまた有益な方法と言える。

また、忘れてはならないのは、詩軸が九州大学の所蔵となり得た背景には、郭沫若と古川直の関係（第六高等学

校及び九州帝国大学の先輩・後輩の関係、縦の関係のみならず、古川直と森本憲治のつながり（九州帝国大学の同窓生、横の関係）も大きく作用していることである。旧帝国大学時代の同窓生同士の絆を垣間見るよつである。

注

- (1) 郭沫若は一九一八年九月、九州帝国大学医科分科大学に入学した。同大学は彼が在学中であった一九一九年四月に九州帝国大学医学部と改称していることから、彼は九州帝国大学医学部卒業となる。九州帝国大学時代の彼の生活に關しては、武継平著『異文化のなかの郭沫若——日本留学の時代——』（九州大学出版会、二〇〇二年）に詳しい。
- (2) の三点は一九五五年に郭沫若が訪日した際、九州大学で揮毫したものである。一九五五年の訪日に関して、劉徳有著、顧娟敏編注『随郭沫若戦後訪日——回憶与紀実』（遼寧人民出版社、一九八八年）に詳しい。なお、同書の邦訳として、村山孚訳『郭沫若・日本の旅』（サイマル出版会、一九九二年）がある。とりわけ墨跡・扁額「福地万間広」に關して、瀬尾愛三郎「郭沫若先生（九州大学医学部同窓会報『学士鍋』第一三三号、一九七五年）、占部治邦「郭沫若の書」（『九大学報』一一九三号、一九八二年）に紹介記事があり、拙稿「郭沫若の訪日と福岡・九州大学」（『九州中国学会報』第四十七巻、二〇〇九年）もあわせて参照されたい。
- (3) これも一九五五年の訪日時に書かれたものであるが、前掲三点とは異なり恩師の中山平次郎に贈られたものである。拙稿「九州帝国大学留学生の郭沫若が見た『千代の松原』」（『中国文学論集』第三十七号、二〇〇八年）参照。
- (4) 寄贈された書籍名等に關しては、前掲注（2）拙稿「郭沫若の訪日と福岡・九州大学」を参照されたい。
- (5) 劉徳有著『時光之旅——我経歴的中日關係』（商務印書館、一九九九年）八二八〜八三七頁を参照。同書の邦訳として、王雅丹訳『時は流れて——日中關係秘史五十年』上下二冊（藤原書店、二〇〇二年）がある。
- (6) 森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を圖書館に寄贈」（『学士鍋』第八五号、一九九二年）に紹介記事がある。筆者は第十八回貴重文物講習会（一九五五年郭沫若の九大訪問とその軌跡、九州大学附属図書館医学分館、二〇〇九年三月十三日）を担当させていただいた。その際、林田和政医学図書館専門員らのご配慮でこの詩軸を見る機会に恵まれ

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅袂」詩軸について

た。心から感謝の意を表したい。

(7) 顕彰碑は二〇〇八年三月、燦燦会（九州大学医学部一九五八年度卒業生有志、代表世話人杉岡洋一元九州大学総長）によって建立された。

(8) 前掲注（6）、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」中の翻刻は、「美」を「羹」に誤る。

(9) 成都市図書館編印、一九八〇年、一一五頁。なお、『崑崙行』は未見。

(10) 郭沫若著作編輯出版委員会編、人民文学出版社、一九八二年、四〇二丁四〇三頁。「舟游陽朔二首」其二（全集）は「灘水」を「滴水」に作る。以下、本稿に挙げる該当詩歌は『郭沫若全集』に拠る。

(11) 前掲注（6）、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」。上海篠崎医院は一九〇〇年に篠崎都香佐つかさが上海の日本人租界に開いた医院である。篠崎都香佐は初期の商務印書館（一九〇三〜一九一四）の日本人投資者の一人でもあり、当時の上海における相当な実力者でもある。樽本照雄「商務印書館の日本人投資者」（『清末小説』第二十九号、二〇〇六年）を参照。また、福民医院は、一九二四年に頼宮寛とんくわんが上海の日本人租界に開いた総合病院であり、許広平（一八九八〜一九六八、魯迅の夫人）が周海嬰を出産した病院としても知られる。陳祖恩著『尋訪東洋人——近代上海的日本居留民（一八六八—一九四五）』（上海社会科学院出版社、二〇〇七年）八一〜八四頁参照。

(12) 一九九二年一月七日、古川直が森本憲治に宛てた書簡（前掲注（6））、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」の引用文に拠る。郭沫若と古川直は第六高等学校（現 岡山大学）及び九州帝国大学の先輩・後輩の関係で、両者の卒業年は次の通りである。

	第六高等学校卒業	九州帝国大学医学部卒業
郭沫若	一九一八年七月	一九三三年三月
古川直	一九三二年三月	一九三五年三月

このように、両者の卒業年が異なることから、両者はそれぞれの在学時に岡山及び福岡では面識がなかったと思われる。内山完造と中国人、当時の在上海日本人との交流に関しては、周国偉著『魯迅与日本友人』（上海書店出版社、

二〇〇六年)、太田尚樹著『伝統の日中文化サロン 上海・内山書店』(平凡社、二〇〇八年)等に詳しい。また、古川直が書簡でいう「奥さんの事」とは、一九四六年八月に于立群が五女・郭平英(現北京・郭沫若記念館館長)を出産したことを指すものと思われる。

(13) 一九九二年一月三十日、古川直が森本憲治に宛てた書簡(前掲注(6)、森本憲治「古川直君 郭沫若詩軸を図書館に寄贈」の引用文に拠る)。

(14) 郭沫若と交友があつた日本人のうち、その代表的な人物は田中慶太郎(一八八〇〜一九五一、文求堂初代主人)である。両者の交友に関しては、田中壮吉編『日中友好的先駆者「文求堂」主人 田中慶太郎(汎極東物産株式会社、一九八七年)、馬良春・伊藤虎丸主編「郭沫若致文求堂書簡」(文物出版社、一九九七年)等に詳しい。とりわけ、後者の両者の書簡の遣り取りに関しては、伊藤虎丸、陳福康、李慶国各氏等の研究論文がある。一方、田中慶太郎以外の人物(例えば、亡命時代の郭沫若と交友のあつたその他の日本人)に関する研究は、管見の限りほとんど見られない。

(15) 森本憲治は九州帝国大学医学部卒業後、ややあつて福岡市博多区吉塚に森本医院を開業。森本憲治はすでに他界しており、現在は息子の丈士氏が同医院を継いでいる。

(16) 前掲注(12)、一九九二年一月七日、古川直が森本憲治に宛てた書簡。

(17) 于立群(一九一六〜一九七九)は郭沫若の当時の夫人。杜国庠(一八八九〜一九六一、京都帝国大学卒業)、何公敢(一八八八〜一九七七、東京帝国大学卒業)、白鵬飛(一八八九〜一九四八、東京帝国大学卒業)は、ともに日本の旧帝国大学の卒業である。郭沫若と彼らの日本留学期間は一部重なるが、日本における彼らの交友に関しては、まだ十分に明らかではない。沈蘭冰は白鵬飛夫人である。なお、桂林から陽朔までの距離は約八十キロ。

(18) 本稿に引用する「洪波曲」は、『沫若文集』第九卷(人民文学出版社、一九五九年)に拠る。とりわけ、桂林から陽朔に向かう様子に関しては、第十六章「入幽谷」の「舟游陽朔」(二三〇〜二三二頁)に詳しい。なお、同書の邦訳として、岡崎俊夫訳『抗日戦回想録』(中央公論社、一九五九年)、小野忍・丸山昇訳『郭沫若自伝6』(東洋文庫、二三四、平凡社、一九七三年)等があり、適宜参照した。

(19) 田螺(青螺)に関して、劉禹錫『望洞庭』(『劉夢得文集』外集卷八)に「遙望洞庭山翠小、白銀盤裏一青螺(遙か九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紗」詩軸について

に望む 洞庭山翠の小なるを、白銀盤裏の「青螺」という用例がある。また、出典とは言い難いが、「青螺」と「白馬」を対句で用いた用例に、「似説怒濤仍白馬 還看遠嶂只青螺（怒濤 仍ほ白馬のごとしと説ふが似く、還た遠嶂を看れば 只だ青螺のごとし。）」（陳恭・吳山）、「甬上宋元詩略 卷八」がある。

(20) 曹操「短歌行」（『文選』卷二十七）に「對酒當歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。慨當以慷、憂思難忘。何以解憂、唯有杜康。（酒に對へば當に歌ふべし、人生幾何ぞ。譬へば朝露の如し、去日は苦だ多し。慨いて當に以て懐むべし、憂思忘れ難し。何を以てか憂ひを解かん、唯だ杜康有るのみ。）」とある。

(21) 瀛江では冬でも鵜飼いが行われている。郭沫若が詩中でいう「漁火」とは、瀛江の鵜飼いを指していると思われる。また、前の句でいう「舟を停めて飽食す 江魚美し」も鵜飼いで捕れた魚を指すかもしれない。

(22) 京劇の男役（敵役）のうち、顔に墨を塗ったもの。沈痛悲壮な歌を歌う。

(23) 京劇の題目で、北宋の武人・楊業に取材したもの。

(24) 前掲注（18）、『沫若文集』第九卷、二二九頁。

(25) 郭沫若は一九三六年秋、「銀河倒瀉自天來（七言絶句）」を色紙に揮毫して、交友のあつた増田涉（一九〇三—一九七七）に贈っている（増田涉「郭沫若——亡命前後——」『中国』、一九六九年四月）。この詩の初出は傅抱石「蒼山淵深」（一九三五年、東京での作）上に題画詩として書かれたものである。つまり、郭沫若は会心の作（思い出の作）を改めて別の人物に贈ることがある。この点に關しては、蔡震北京・郭沫若記念館副館長兼中国郭沫若研究会会長にご教示いただいた。また、傅抱石の同作品及び郭沫若の題画詩は、郭平英主編『郭沫若題画詩存』（山西教育出版社、一九九七年）にある。

(26) 当時の郭沫若一家の構成は、以下の通りである。

郭沫若、于立群、郭漢英（長女、一九三九年生）、郭庶英（次女、一九四〇年生）、郭世英（三女、一九四一年生）、郭民英（四女、一九四三年生）、郭平英（五女、一九四六年生）

一方、古川直一家の構成は、古川直、はる（妻）、マサコ（娘、一九四〇年生？）、詳細は不明。

(27) 前掲注（18）、『沫若文集』第九卷、二二九頁。

(28) 郭沫若と于立群が正式に結婚したのは一九三九年五月である。

(29) 郭沫若の場合、「全集」編纂時の諸事情により、「全集」未収録の佚作が多く存在する。詳細は次の文献を参照。

・楼適夷「關於編輯出版 郭沫若全集 一些情況和問題」(『郭沫若研究專刊』第二輯、一九七九年)

・徐慶全「關於 郭沫若著作編輯委員會 成立會議的記錄」(『中華讀書報』、二〇〇四年四月十四日)

・魏建「關於郭沫若文学佚作的報告」(The International Guo Moruo Academy (IGMA) 編『PROCEEDING OF INTERNATIONAL GUO MORUO ACADEMY Guo Moruo in World Literature and Culture』、二〇〇九年)

また、アジア・アフリカ図書館(東京・三鷹)(財)アジア・アフリカ文化財団)の「沫若文庫」には、亡命中の郭沫若によつて揮毫された多くの詩軸が所蔵されている。近年、文庫の目録である(財)アジア・アフリカ文化財団創立五十周年記念誌編纂委員会著『沫若文庫目録 アジア・アフリカ文化財団創立五十周年記念誌・別冊』(財)アジア・アフリカ文化財団、二〇〇八年)が発行されたが、これらの詩軸は未収録。その中にも「佚作」が含まれていると思われる。更に、近年日本に残存する郭沫若の書に関する報告が相次いでいるが、紙幅の都合でここでは省略する。

(30) 「舟游陽朔二首」其二に先行する其一は次の通りであり、前者同様に漓江下りの様子を述べたものである。

臨流扣楫且高歌。 流れに臨み楫を叩きて 且らく高歌す。

拔地群山奈爾何。 地は群山を抜くも 爾を奈何せん。

白馬嘶風奔碧落、 白馬 風に嘶きて 碧落に奔り、

青螺負雨压長河。 青螺 雨を負ひて 長河を压す。

茅臺斗酒奚辭醉、 茅台の斗酒 奚ぞ酔ふを辞さん、

宣室叢談不厭多。 宣室叢談 多きを厭はず。

暫把烽煙遺物外、 暫く烽煙を遺物の外に把る、

此游我足傲東坡。 此の游 我 東坡を傲るに足る。

第二句目は「力拔山兮氣蓋世、時不利兮雖不逝。雖不逝可奈何、虞兮虞兮奈若何。(力は山を抜き 気は世を蓋ふ、時利あらず 雖 逝かず。 雖の逝かざる 奈何すべき、虞や 虞や 若を奈何せん。)(項羽「垓下歌」)を踏まえる。

九州大学所蔵の郭沫若「盈盈灘水碧羅紉」詩軸について

(31) 龔繼民・方仁念編、天津人民出版社、一九九二年。

(附記) 本稿は、「First World Congress of the International Guo Moro Academy (IGMA)」(於アメリカ・Johns Hopkins

大学、二〇〇九年八月二十七、二十八日)において、「試論 日本・九州大学所蔵郭沫若相關文物——以新發現的詩軸『盈盈灘水碧羅紈』為中心」と題して口頭発表(英語及び中国語)した原稿をもとにしたものである。IGMA 藤田梨那会長、魏啓明組織委員長の他、当日会場で貴重な意見を頂戴した諸先生方に衷心よりお礼を申し上げます。

〔図版〕墨跡・詩軸「盈盈灘水碧羅紈」(軸、九州大学附属図書館医学分館蔵)

